日本口腔顔面痛学会 News Letter No.66

（2024 年 2 月 21 日発行）

日本口腔顔面痛学会理事長　小見山道
広報委員会担当理事 山崎英子　委員長 池田浩子

今回は 2023 年 12 月 8-9 日に行われた第 45 回日本疼痛学会について愛知医科大学病院　疼痛緩和外科・いたみセンターの西須先生に報告していただきます.

第 45 回日本疼痛学会参加報告

愛知医科大学病院　疼痛緩和外科・いたみセンター　西須大徳

2023 年 12 月 8-9 日に、福島県のコラッセ福島で行われた第 45 回日本疼痛学会に参加した。ご存知の方も多いと思うが、日本疼痛学会は国際疼痛学会の日本支部としての役割を担っているため、種々の職業に加え、基礎研究者から臨床スタッフまで参画する学際的な学会である。講演・発表内容も多岐に渡り、横断的に痛みの最新知識を享受することのできる学会である。本会は、現地開催とオンデマンドのハイブリッドであったが、やはり直接議論のできる現地参加は非常に勉強になるものであった。その中で、私が聴いたいくつかの魅力的内容をお伝えしたいと思う。

初日、特別講演として招かれた Claudia Sommer 先生の講演「Chronic pain from a neurologist's view」である。演題にあるように Claudia 先生は神経内科医で、臨床から基礎的研究まで幅広く活動しており、昨今の難治性の疼痛＝中枢機能変化、という視点ではなく、末梢、とくに免疫システムに着目した講演であった。以前より、慢性疼痛疾患の皮膚組織で C 線維が減少することは知られており、口腔顔面領域においては舌痛症での報告もある。このように、末梢組織レベルでの変化があることで神経障害性疼痛としての様相があると考えられていたが、臨床症状との乖離や脳機能画像の発達により、中枢機能異常として捉えられることが慢性疼痛病態の中心になってきた。そういった中で Claudia 先生のグループは、末梢レベルの変化に再注目し、免疫システムに関連した研究を紹介してくださった。詳細は割愛するが、重症の多発性神経障害性疼痛患者では、大経線維における骨髄系細胞による TLR4 の活性化が NF-κB 経路（炎症反応経路）を介して TNFα（腫瘍壊死因子：炎症を引き起こす）を産生し神経障害性疼痛を引き起こしている。その一助として、TRPV1 の減少および、それに伴う SIRT1（NAD+ -依存性蛋白脱アセチル化酵素）の減少が関与しているとの話であった。そしてその一連の反応には、いくつかの micro RNA（タンパク質に翻訳されない 20 塩基程度の 1 本鎖 RNA）が関係するというものであった。これは、多発性神経障害性疼痛患者のバイオマーカーになりうる可能性を秘めている。

Claudia 先生

二日目は、国際疼痛学会のチェアマンを務めた Lars Arendt-Nielsen 先生の話も大変興味深いものであったが、ここでは基礎部門の「病態特異的動物モデルを用いて慢性痛の機序にせまる」をから、大阪大学　中村先生の講演をご紹介したい。基礎の研究を臨床に還元する Translational Research は医学研究の基本となっているが、昨今は、iPS 細胞を用いた研究などに代表されるように、Reverse Translational Research（臨床の疑問を基礎研究で解明する）も多く実践され成果をあげている。本シンポジウムは慢性疼痛における Reverse Translational Research の礎となるものであると思われた。シンポジウム内では、各種動物モデル（線維筋痛症

モデル、ストレス誘発性疼痛モデル、注意欠陥多動性障害モデル、情動成分モデル、脳卒中後疼痛モデル）を用いた研究が紹介された。どれも興味深いものであったが、そのなかでも中村先生は、情動成分モデルを用い創薬研究につなげているのが先進的であった。ご存知のように、不快感覚と不快情動が合わさったものが痛みと定義されている。このモデルはパブロフ実験に代表される古典的条件付けを行うことで作製され、非侵害刺激で痛み行動が発現するマウスモデルとなっている。そして、脊髄レベルでは細胞反応の亢進が見られないのに対し、前帯状回では細胞反応が亢進していることが示された。すなわち、恐怖や不安といった負の情動により痛みが誘発されていることを示している。また、そのモデルに対する治療薬の可能性として、5HT-3 受容体作動薬の創薬と各種疼痛モデルの効果反応を含めた効果についてご説明いただいた。疼痛性疾患は少なからず情動性の成分が入ることとなる。その中でも、三叉神経領域はより情動反応が強い可能性も基礎研究では報告されている。もちろんこれは動物レベルでの話であり、あまりに綺麗すぎるデータの数々であったと思うが、この研究から新たな治療薬が生まれるのではないかという強い期待を持てるものであった。

今回は、主に二つの講演に絞ってご紹介したが、これ以外にもお伝えしたい内容はたくさんあった。大会長の矢吹省司先生（福島県立医科大学疼痛医学講座）は、慢性の痛み事業研究班の班長を担う方である。本会がこれだけ充実していたのも、日本の痛み診療に対する強い思いと人望が成し遂げたものであると思われる。また懇親会では、ご高明な先生が多数出席し、福島の地酒が大盤振る舞いされた。福島出身でお酒好きの私にとっては夢のようなひとときであった。さらに本稿の写真も、矢吹先生より頂戴したものを厳選し掲載させていただいている。矢吹会長には全ての意味で感謝申し上げたい。

懇親会：左から Claudia 先生、大野由夏先生（明海大）、矢吹大会長、Lars 先生

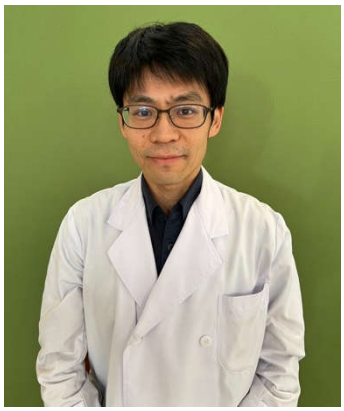
現在は、web 配信の敷居も低くなり、後日オンデマンド配信が行われる学術大会も多く見られる。本会は、痛み診療に携わる先生にとって基礎から臨床まで幅広く新たな知見を得られる場であると思っている。来年は、私の恩師である、星薬科大学／国立がんセンターの成田年先生が主催である。2024 年 11 月 16-17 日に TOC 有明（東京）で行う予定となっているので、会員の皆様においては、是非ともカレンダーに予定を入力していただきたい。

実行委員　集合写真

【西須大徳先生のプロフィール】

【略歴】

2009 年 3 月　東京歯科大学　歯学部卒業
　　4 月　慶應義塾大学医学部　歯科・口腔外科学教室入局
2011 年 4 月　同大学医学部　大学院医学研究科　入学
2015 年 3 月　同大学院修了、博士号取得
2015 年 4 月　同大学　歯科・口腔外科学教室　助教（教育）
2015 年 9 月　Aarhus University Section of Orofacial Pain and Jaw Function 客員研究員



2016年9月　Aarhus University Section of Orofacial Pain and Jaw Function
客員研究員修了
2016年10月　慶應義塾大学医学部　歯科・口腔外科学教室　助教（教育）
2017年4月　愛知医科大学医学部　学際的痛みセンター　助教
愛知医科大学病院　痛みセンター　助教
2018年6月　愛知医科大学医学部　運動療育センター（助教）
愛知医科大学病院　痛みセンター（助教）
2022年10月　愛知医科大学病院　疼痛緩和外科・いたみセンター（助教）

主な所属学会・専門医

日本口腔顔面痛学会　専門医・理事
日本顎関節学会　専門医
日本疼痛学会
日本口腔外科学会　ほか

――――――――――――――――――――――――――――――

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは
「日本口腔顔面痛学会事務局」まで
〒135-0033　東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内
TEL: 03-5620-1953，FAX: 03-5620-1960　E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp